

《参考》 チラシ(裏面)の翻訳

工業革命以来、人間はテクノロジーで利便性を追求する同時、農業と飲食の環境に与える汚染と破壊を忘れていた。人々を農業と再び繋がりを作るため、台湾国立大学農業展示館は「飛鳥踏田－環境に優しい食と農」特別展示・シンポジウムを開催することになった。開会式と記者会見には、農林水産省の食糧署署長が参加され、豊岡市の市長とコウノトリ文化館の館長も日本から参加されます。午後一時からは日台シンポジウムを開催し、環境にやさしい農業の自然への貢献について討議を行う。

「飛鳥踏田－環境に優しい食と農」特別展示には、三大食農教育のテーマを紹介する。

一つ目のテーマは、台湾屏東（ピントン）の「トビの小豆」。

近年、トビの数が急遽に減少し、その原因は農薬の使用で、農薬の残留している動物の死体をトビが食べて、間接的に中毒してしまった。トビをもう一度台湾の空へ飛ばせるため、小豆の農家は農薬の使用量を軽減し、トビと環境に優しい農法を実施している。

二つ目のテーマは、台湾宜蘭（イーラン）の「タマシギ育むお米」。

タマシギの生息地であった水田は、宅地への転換、農薬と化学肥料の使用などに破壊され、昔よくあったタマシギも急減になった。その状況を見て、少数の農家は環境にやさしい農業へ移行し、水田の生態系を回復させるように努力している。

三つ目のテーマは、日本のコウノトリ育む農法。

第二次世界大戦後、日本は農作物の産量を求める一方、生き物の生息地を破壊し、コウノトリもほぼ絶滅しまった。コウノトリを再び豊岡の空に舞わせるため、農家は耕作習慣を調整し、当地の生態環境を回復させた。さらに豊岡市はコウノトリの良い生息地を作るだけでなく、人間とコウノトリが共生できる環境も作って、環境にやさしい農業の事例として世界中にも有名になった。